

考へ合せてさう思ふのである。古川、城、青木、後垣、永原、池淵みな健在で現に満洲藝文のために努めてゐるのだから。

青木君の「やうきな話」といふのは東京での出来事を書いたものだが、同君の持味を立派に示してゐる好篇である。

志賀重昂之野といふのは嫌なのだが、後年にもあちらこちらに書いてゐる志賀清一である。「わらふ魏怡春」は「満洲浪人三三三氏の話」と傍題し、野心的な山篇耶一回であつた。

三沼柳子も永原君の手だつたやうに思ふがはつきり覚えなない。

篠原の「朝から次の朝まで」には「映薄風に」といふ添へ書きがある。彼の才能を見せた作だが、粗雑だ。そのことは簡單には言ひ切れないが、やはり近作「鴨越分隊」にまで通じてゐると思ふ。鴨越分隊」についての補鑿體の意見には筆者は異論がある。が、これは此の機会に……)

『梅』には「ミーストップ」といふゴシップ欄があつた。その一例。

讀物作家の野村胡堂氏、満日に連載してゐた「曠野に築く夢」を中断したが、理由とする點は、あの作品を家産欄に叩き込んだ事に端を發した憤激ださうな。往平「藝術家の個人生活を論ず」なんて素晴らしい尊嚴性を示してゐた氏としては、眞にさもあらん事ながら、近頃の鳴鶴あたりの骨

見たいな、さういふ少女のウルトラ、エロはいさゝか。

——これはさうとツとニゲツナイと思ふのだが、それで通つて行つた。それだけの「ゆとり」のゆしさがある頃にはあつたのだと思ふ。初期「文藝春秋」なんかの影響と言つてしまへばそれだけだが、相當貝殼遺的の容を持つた短文もあつたと思ふ。近頃の新聞のゴシップみたいに骨抜き、形を變へた阿諛になつてしまつてはさうも面白くない。

この頃、今の「信文」派前身が『観』といふ小さな(形の上で)雑誌を出してゐた。いま手許にはその第三號があるが、次のやうな目次である。

- 詩 死の唄 (ポール、フォール)
- 隨筆 春をよめる
- 創作 挿話として
- 同 白心
- 同 こんな話
- 批評 文藝月評

長谷川泰造

長谷川泰造

竹内 正一

高木 征三

青木 實

大谷 武男

同 滿洲ジャーナリズムへ瞥

S O S

同 卓上噴水

同人

四六判七半ボ三段組本文十六頁だが、内容には一種の良さがあつた。「卓上噴水」欄に於ける「大谷」。人形師が人形を造るやうに丹念に小説を書き、批評を爲し、又その様に生きた彼女をも作り上げようとする男。青木、小娘のやうによく笑ふ。そのくせ笑ひ乍らに相手に油断をさせて置かない。某喫茶店にゐるベティ、アーマンに似たお嬢さんを見たいばかりに『室で珈琲を呑む會』を眞先に脱走した男。高木、この記憶力の化者は何時も憂鬱さうに何を考へてゐるのか。晴曇定かならず、向意氣も中々に強し、但し御婦人を除く。竹内、此の男最も淺聞し——これはケンソン、美點あまりに多し」といふ一文の如きなか／＼たのしいものではないか。そして、これにはあの『白樺』と脈を通ずるものも感ぜられ、今にして思へば、最近自爆した『作文』にまで貫いてゐた同志的結合、それも清純な氣質、稟質をすでにそこに豫示してゐたではないか。宜なる哉、『線』の同人は言つてゐる。

『線』同人は夫々の立場に於いて、絶對に自由である。その創作態度に於いて、その對人關係に於いて、只それを貫くに兄弟のやうな友情を感じるのみだ。その點誤解のないやうに願ひたいところだ。『衝』は更に發展する——

第九章 『大陸文學』と當時の新聞雜誌

前章に書いた『線』の第三號に『滿洲ジャーナリズムへ瞥』といふのが出てゐる。當時の滿洲の文學を中心としてのジャーナリズム情勢を語る一資料として興味があるので左にそれを寫して見る。筆者は『SOS』といふ匿名。

「協和」ヤワラカクした社報。唯それだけのもの。然し社員會はこの雜誌に依つて僅かに存在を認めさせてゐる。ある人が短歌を投書したら、特に批評をつけて返送してくれたさうである。この雜誌に於てさういふ事をきくのは面白いことではない。

「合萌」誌代が「滿洲短歌」より十錢安いだけに、内容體裁どちらも十錢方劣つてゐる。

「滿日」文藝欄をやめたのは、急進的分子の活躍がコワかつた爲らしい。學藝欄をよしたのは、

新社長の意志らしい。何れにしても、散々寄稿させておき乍ら、無断廢止するなどバカにしてゐる。

今後ハセ萬とか、三宅やすとかジャーナリズムの中古(チウブル)が寄稿をする。しいが、そんなものが讀みたくば満日より安い東京の新聞を購讀する。紙上で内地の延長を排し乍らそれを同時に読つてゐるのだから笑止である。

「大陸文學」と三角大内隆雄氏の眞摯な態度には好意がもてる。

「大新聞」内地新聞雜誌からの轉載は、その由を紙上に明かにすべきである。讀賣の文藝欄から誤植を發見するのは、困難である。この文藝欄から、誤植のない記事を發見するのは困難である。

「燕人街」萬葉集の古典要素と、プロレタリア的色彩とが、どんな點で握手できるのか？

「胡同」早く大道に踏み出すべし。

「新天地」マンネリズムに墮ちてゐる。

「亞東」薄い型の雜誌だが、相當面白いものが載つてゐる。

「新童話」かく整つたものを、果して子供は喜んでゐるのであらうか？

「滿蒙」次第に學術的になつてゆく。

「運動と趣味」カジノ、フォリーを見たあとやうに、讀んで頭にのこる何者もなし。

「月刊掛順」滿洲で最も商賈氣を出してゐる雜誌。それだけに一寸手にする興味が湧く。

「線」自己陶醉から脱してゐない。

以上の如く、相當に辛辣なものである。満日や大連新聞についての評言の如き、その文藝欄に関する限り、當つてゐたやうである。

文中『大陸文學』といふのがあり、筆者が「とに角」賞められてゐるが、これは獨立した雜誌ではなく、或る期間、私が『大陸』といふ雜誌の文藝欄を引き受けて編輯してやつた。それを指してゐる尤も、若干部数の別刷とこしらへたので、實質的には、刊行物とも見られたらう。

『燕人街』萬葉集の古典要素とは、橋本八五郎のものを指してゐる。

『亞東』といふのは亞東印畫協會といふ所から出してゐた支那各地の寫真集に附録として出されてゐたもの、櫻井といふ人が支那各地に出掛けて寫眞を撮影して廻つたもので、私は會つて寧波、紹興でその人たちに會つたことがあつた、同じやうなもので『亞細亞大觀』といふのも出てゐた。『亞

東』には小佐厚之、加藤新吉、奥村義信等が書き、『亞細亞大觀』には石原巖徹、八生などが書いた。

『新童話』には石森延男あたりが活躍してゐたのだと思ふ。

『運動と趣味』は西村半旗がやつてゐた頃であらうか。或ひはもつとその前かも知れない。長唄か、競馬、ダンス、映畫、いろんなものを載せた雑誌であつた、一時、高尾憲太郎もこれに關係したことがあつたと思ふ。

『大陸文學』のことが出たから、それについて少し書く。

昭和五年十月の目次が次の通りである。

- 何 氷 江 日本人
- 大内 隆雄 長沙テロルの記録
- 一石 半量 人間風景、酒々
- 柿沼 實 五月の感傷

何 氷 江 九月の詩

同人 雜記 紹介と短評

何氷江は吉川巖一郎である。彼には珍らしい短篇小説を書いてゐる。

一石半量とは後藤計吉。後藤は昭和五年頃、大連での演劇運動に努力した男だつた。これは戯曲の筋書のやうなもの。柿沼實のも短い戯曲。何氷江の「九月の詩」は批評で、その頃の滿洲詩壇への解説になる。左にそれを寫さう。

九月號『燕人街』の數ある詩篇の中から、僕は北透氏の「雨の日」を面白く讀んだ。單純性と明朗性（形式に於いて）を具備したところこの一篇はいさゝかのすきもない。而して内容的には、生活を基調としたところにこの詩は迫力を有してゐる。すべてを云ひつくして猶ほ胸に残るものがある。ルンペン、プロレタリア（生活的に）の憤怒がぶつ／＼と湧き上つてゐる。

『燕人街』はその標題の如くよく苦力の詩が出てゐる。僕は苦力を描いた詩に多大の興味を抱いてゐるものであるが、宮川氏の「列」に於ける苦力は單なる「列」で終つたことに失望を覺え

る。水島氏の「華工」又然りである。

「幸兒溝あたりの支那人の生活は、日本人の（インテリと云ふ意味を含めて）常識などで同情したりファンガイしたりされたくらいものだ」

と云つた或る「燕入街」同人の言葉と思ひ浮べて今後の『燕入街』の中よりあらゆる苦力の諸種相が現はれるであらうことをそのしみにしてゐる。

そんな意味で『戎克』九月號に現はれた島崎氏の「苦力養殖公司」は面白いには違ひないが現實性が無い。もしニューリアリズムと云ふハンデキャップつけて、僕自身意識を解消したとしても「苦力養殖公司」の六字だけでいゝやうだ。ともあれ「苦力養殖公司」と云ふのは面白くて皮肉なだけだ。

其外同じ『戎克』の第一頁にある加藤氏の「赤の作用」の第一章はいい。恐ろしく速度が早い。次にある稻葉氏の「悪臭」瀧口氏の「崖の上」なども面白い。

面白いと云へば城小確氏の「大陸に消えて行く装甲列車」の牌々々は愉快。然し僕にはこの牌々々……の文字がマントウのやうに見えてならなかつた。

『街』の創刊號を或る人に見せてもらつた。詩が少くない。載つてゐるのは少女詩四篇だけであつ

た。満洲郷土藝術を盛り立てる『街』の今後の詩壇に期待してゐる。殊に民謡方面に對して――

なほ同號に、筆者の書いた「紹介と短評」があるから、それを紹介して置く。

『青泥』第六號 九月

こちらは川柳は素人だが、讀めば面白い。殊に興味を持つてゐるのは、鋭い社會批判の作だ。「失業の雲の行衛を見るばかり」（天弓氏）などピリリとする物がある。

『戎克』第十七冊、九月

どうも難解だと言ふ者がある。

だが諸氏の氣力と精進は尊敬したい。

古川君のは異彩があると思ふ。加藤郁哉氏の「赤の作用」には氏の轉向が窺へる。

『滿洲短歌』九月號

今月は頸觸れが少し寂しいやうだ。河本茂次郎氏、城所英一氏は新しい取材を示してゐる。水樹壽夫氏の作は深刻直截である。新人にはもう少し勇躍を望みたい。

『燕人街』 九月號

篠垣、太田兩氏の論はうなづける。詩作に、鍛錬が足りないと思はれるのは如何？ 高橋氏の詩は素朴な形式の中に強いものを凝集しつゝある。

『月刊撫順』 九月號

特殊な雑誌だが、豊富な内容で、讀ませる所が多い。都路氏の「支那劇の話」等は素晴しくいゝ、創作はもう少し金を掛ける要があらう。

この「短評」は自分ながら、大禮當を得たものであつたやうに思ふ。『青泥』について書いてあるが、これは有原殿徽先生がその仲間とやつてゐたので、當時私は石原先生と勤め先で文字通りに机を並べて居り、石原先生は『青泥』が印刷所から届けられて來ると「ホイ、一つ出來た、まア見てくれ！」さう言つて私に一部寄越したものであつた。

『月刊撫順』がちよつと賞められてゐるが、城島君は當時から例の商才とエロ味で雑誌を賣つたものであつた。「創作はもう少し金を掛ける要があらう」と言はれてゐるが、『月刊撫順』が無代の原稿を集めて得意にしてゐたのは有名な話で、創作潮はどうにもお粗末であつた。

さて『大陸文學』十一月は、次のやうな目次で現れてゐる。

初冬

五月の感傷

インテリ決算

秋

ロシアの小説二三

輪を描く

秋晴れ

大陸文藝陣、後記

古川賢一郎

柿沼 實

篠垣 鐵夫

懸橋 淺夫

川内 堯

五斗 計器

西山 一雄

この古川賢一郎の詩は異色あるものであるから、こゝに寫して置こう。

初冬

一四八

古川賢一郎

北平薛眞微氏作畫展覽出品目錄

- 一、菊 花 金十四元
- 二、荷 花 金十二元
- 三、月季海棠 金十六元
- 四、菊花老年 金十元
- 五、……………
- 六、……………

私は畫會の案内狀をひろげ、ストーブの傍で机に向つてゐる。外は北風。

詩の書かない焦躁の、何かに打つつかりたい激しい心情を抱いて、私は案内狀の餘白で金の勘定をやつてゐる。

魚屋 二圓

野菜屋 一圓五十錢

三義興 二圓十九錢

新聞代 二圓二十錢

ガス、電燈、購買組合

外套の月賦

石炭代

通院料

入院料

(あゝ、限らない生存費の支拂ひ……)

美しい案内狀の餘白を、煤煙のまうな鉛筆の文字で、白々とうそ寒い紙のおもてを埋めてゆく

篠垣鐵夫は申村秀男である。懸橋淺夫は近東綺十郎。

川内蓬の「ロシアの小説二三」といふのは次のやうなものであつた。

社会的、又文化的に興味深き「新生活」を反映させたロシアの小説が英譯された。アナトール、マリエンホッフの「冷笑家」はその一つである。この作者は一九八一年から二一年への暴風時

代に育ち、以前は難しい詩を書いていた。これは日記體に書かれてゐる。オルガといふ女が主人公だ。インテリで美貌で教養のある女だ。それだけに革命の波の泡の上に乗つて行くやうな女だ。彼女の最後は自殺である。かゝる女性の型は近年のロシアに屢々見出されたといふ。グーミレフスキーの『犬小路』は注意すべき作である。地方の大學生が描かれてゐる。テーマは「新しき性生活」に關係してゐる。青年は仕事の合間に數々の女性と交はる。彼等の「知的な、リアリステイックな兩性間の關係」を見出すのだ。イリヤ・イルフとユウゲン・ペトロフの「腰掛けダイヤモンド」は「間違ひ喜劇」ともいふべきもので明るい笑ひを提供してゐる。——アレキサンダー・ナザロフに據る。

この川内義といふのは筆者なので、これは「ニューヨーク・タイムス」の『文學週刊附録』所載記事に據つて紹介したものであつたと記憶する。

少し飛んで翌年の六月になると、『大陸文學』の目次は次のやうになつてゐる。

滿洲人文地理	楠	筋太
おれたち(詩)	殷	夫
ストロング女史の近著		
遼河の春(詩)	懸橋	淺夫
大陸文藝陣		
中國の小説選集	大内	隆雄
苦力の如く——城小雅君に與ふ——	古川	賢一郎
『蒙古十月』——生活萬歳だ	大内	隆雄
作家よ手をつなげ	同	人

懸橋淺夫はこの頃から賣り出しと言へるであらう。『遼河の春』といふのは次のやうな作品であつた。

遼河の春

懸橋 淺夫

冷えた陽炎よりも動かない大地は
 まだび乾びた恐龍の木乃伊の如くによこたはる
 最後の馬賊を撃ち殺した巡警の、最後のピストル
 つい一週日前の北園林子（綏化）からの通信である
 ——どこか南の方の街角の赤ポストに投りこまれる桃色風の封筒——

そよぎ出した血脈に似た枯草たち
 乾いた凍雪帯の鋸屑たち

風は凍水つた大地の肋骨の間に

静かな蒼い鏡！ 生命！ をはめこんで行く

水滴のやうに融け出した大地が

地熱のやうな力を眼覚めかけてゐる

崩れ出した崩岩（ベタ）群よりも廣漠いツンドラ原野の春への遁走である

紅興鎮の馬賊の通信が断絶した
 景星山の星が死んだ

松花江（スنگアリ）から紅杏の花信を擁へた風がやつて来て、満洲野一杯をひうぞうと吹き流
 れた

解氷季來了

流水

流水

徐々と蠢き出した自然の優しい暴力

これがどこかの山の上で振られてゐる、遼河汎濫出帆信號旗だ

雪崩のやうに北上する飢えた山東の苦力達よ

舟せこけた満洲水田の寄生群よ

決潰する遼河のひろきでとび廻れ

蒲團を捨てて心一杯の夢を背負つて
耕域の奪取戦だ

滿洲の放浪鮮人達よ

掘立小屋を出て見よ

春が来たのだ

大遼河が笑ひ出したのだ

芬々匂ふ杏の風だ

曠野をはつて来る蛇のやうな雪融の快足だ

むづ痒い濕疹にかゝつた大地が

今、旺んな萌芽に向つて發疹しようとしてゐるのだ

あゝ、行程千里の大遼河に

結氷砂利の如くに碎かれ始めた

滿洲は今

零下四十度の惨虐を不毛と暴嵐との夜から

阿片中毒の冬から解放されるのだ

芬々亂れ匂ふ杏花の風――

熊岳城、瓦房店――南滿一帶の莊僻は今白線を綴り合せたやうな

林檎の花の眞盛りだ

その懸橋は、『戎克』の十九號には「胡秋信」といふのを出してゐる。島崎恭爾の書いてゐる後記によれば、これは投稿だつたのである。そして懸橋は當時は長春にゐたのであつた――

胡秋信

晴暗の多い秋の日の昏れ、冷たい髪を梳きながら

故國の秋をおもふと言ふ女――

冷えた身體を温める火さへもない胡國の秋の深さ

懸橋 淺夫

徐かに哭いたあとのまびしさも、男に肌を任せると言ふ女――
梳櫛にたまる抜毛を授けすて、空虚の心を驕情させる白い笑ひ
あゝ人に捨てられ人を恐れなくなつた女――
その酔ひどれの夜の姿影は曠野に發る落日光よりも尙傷々しい

――好いお天氣よ、あなた――

ほのかに濡れた硝子の外に流れる暁の色、どこか心をうるませる

青涼の朝のひところ、いつに染みかか離れがたい情思に引きづられ

哭きあかさされた哀歎の夜のもと今は感情も透き寄せ、まびしい微笑の流れる

――日本も秋だね――

街を行く支那馬車の鈴に聞き惚れると心もはれて、窓際に立つ女の姿體が瘳せ細る

懸橋はその頃から「花香」とか「胡秋信」などといふ文字を使ふことが好きだつたらしい。それは後

年の彼のものにも及んでゐる。『戎克』は後に島崎恭爾の個人詩話となつたが、その島崎恭爾の『國
際都市』は豪勢な詩集であつた
その一篇――

朝なり

見よ憂鬱なる鉛色の空に

赫黒き汽關車工場の層は

生命の煙を吐く

島崎 恭爾

見よ雪上を歩みよる黒き鴉の群は
生活の扉を押す

朝なり

第十章 『胡同』『曙人』『滿洲文學パンフレット』

そして『滿洲文藝年誌』

こゝで、奉天で刊行された二つの雑誌について書いて置く。

一つは『胡同』。これは詩と短歌の雑誌であつた。手元にある第一巻第五號（昭和六年六月號）を見ると、詩に瀨々洗、柿沼實、土龍之介、落合郁郎、清武丘陽、極鈍郎、大川一夫、園淑郎、杉島豊彦が作品を並べ、短歌では初野實、ゆきをしみづ、小山暎雄、岩永雪子、兒玉二郎、長野祐俊、神山哲三、園淑郎が並んでゐる。……今日、その二三の人を除き、名を聞くことのないのは寂しいことである。

もう一つは『曙人』。これは滿洲醫科大學文藝部から刊行されたものであつた。手もとにある第五號（昭和六年一月號）の目次を見ると次の通りで、なかなか元氣なものである。

苦悶の田園文學を目指して

恐慌と戦争

灸をすへる（文藝時評）

一九一四年の日記（瀾譯）

新しい仲間に（詩）

何を話せばいゝのじや（戯曲）

水野の話（小説）

駒越 哲貞

水原 繁夫

月島 燐太郎

コロンタイ

大内 隆雄譯

清水 敬

築地ふゆ子

滿洲醫大といふのは、曾つての滿洲文化史の中では相當な役割を果して來たことが想起される。大正年代に、全滿中等學校辯論大會を催したことがあつたし、音樂の方面での活動も周知の如くである。文學の部門でも白石義夫（冬木羊一）をはじめ、かなりの作家を出してゐるが、『曙人』時代の活躍もなかなか光采あるものであつた。（冬木羊一はこの年週刊朝日に「青島から來た女」が當選し松竹で映畫化された滿洲で公開されたのは翌七年秋だつたが大した評判だつた。）

さきにも書いた大連の『街』は、第二號では新銳十作家短篇集といふ特輯を行った。並んどののは次のやうな顔觸れであつた。

一六〇

雨と肉體と

天幕生活

チヨーク隊

守衛(戯曲)

死灰の街

彼等の雇主

アパートの女

子守唄(戯曲)

街の小英雄

専有する女

近東綺十郎

青木 實

大内 隆雄

志賀志賀之助

冬木 卓

藤木 美邦

大谷 武男

篠垣 鐵夫

高尾 雄二

大澤 壯一

この内、大部分は今でも滿洲で健在だと言へるのだから、十二年前の滿洲文學もたのしいものであり得たわけである。

近頃の「雨と肉體」とは、いかにも彼らしい表題であるが、内容は當時の風潮を反映してかなりに傾向的なものであつた。

青木實のは珍しく諷刺的な小話集。

冬木卓とは古川賢一郎。「死灰の街」は隨筆風なものだが、法庫門、鄒家屯間の一色環の實相を描いた異色ある一篇だ。

大谷武男「アパートの女」は彼らしい小品だ。

篠垣鐵夫(申村武男である)の「子守唄」はやはり傾向的なもの。

高尾雄二の「街の小英雄」は彼の才分を示したもの。

なほ同誌の「文藝時評」を見ると、「ジャーナリズムの新扮装」「いかなる藝術國策をかく」「同人雑誌の役割の限度」といふ三項目で、それを見ても、およその傾向が察せられよう。ほかに、中島嵐兒、城小確の詩、三沼柳子の短歌がある。

また同誌には、サノシヤンで吉川賢一郎氏『蒙古十月』出版、『燕人街』廢刊、及び『雨』復活を

併せ記念して文藝座談會を催した、出席者二十八名、談論風發だつたとの報告がある。

さて、相當な意氣込みだつた『街』も意の如く行かず、つぶれてしまつた。そして

そのあとを受けたやうに、『滿洲文藝研究會』が生れ、『滿洲文藝ペンフレット』（滿バンと略稱した）を二回、刊行した。第一輯は『制作と研究』と題され、第二輯は『十一月』と題した。昭和六年秋のことである。『制作と研究』は柳瀬正夢の表紙で、次のやうな内容であつた。

創作 一つの型

- 同 耳を病む私達 青木 貫
- 同 或る友への手紙 阿武 洗二
- 同 歪められた人生 三沼 柳子
- 同 支那犬を殺した鮮人 椿 美代子
- 同 施療病院點景 冬木 卓
- 同 大鼻老六とあいつ（周奇選） 篠垣 織夫
- 大藤 觀譯

詩 轍

- 同 秋 城 小確
- 同 恋月様 黄 靖男
- 川柳詩 ぬち切れた心 中島 嵐兒
- 短歌 アカシヤ會詠草 山尾水叫坊

ビリニヤークの「ヴォオルガはカスピ海に注ぐ」

ニデイス・エチ・ワルトン

田漢は如何に轉換したか？（一）

吳 士 星

ゲーテ賞を得たりカルダ・ヒニツフ

ガフイエル・ロイター

ロシアに於ける政治、戦争そして映畫

星野てつ譯

朝鮮文藝界の現在

松野 光一

内容に於いて『街』の時代よりずつと眞摯になり、また世界文學研究に努力してゐることが注目される。

青木貫の『一つの型』では彼が廣く眼を社會に向けて來たことが知られる。

冬木君は『支那犬を殺した鮮人』で當時の在滿鮮系を扱つてゐる。

天藤譯の支那小説は當時南京で刊行された『時事月報』から採つたものであつた。

ピリニヤークの新作が紹介され、翻譯の變化が研究されてゐる。リカルダ・ヒツニフが紹介され、ソ聯映畫『帝國の破片』『都市と年』が紹介されてゐる。朝鮮の文學についての報告もある。

編輯後記を見ると「報告」として次のやうなことが書かれてゐる。

○滿洲文藝パンフレットは一定の恒常的イデオロギーに於て編輯されるものではない。だから作品も、文學的レベルに達したものは全部抱容する。

○研究會類合會で全員の承認を得たものに次のやうなものがあつた。

A、作品は大衆的基礎に立つこと。

B、研究的なものも掲載する。等

當時の情勢をよくこゝに反映してゐる。

『滿洲文藝パンフレット』第二輯『十一月』は次のやうな内容をもつて現れた。

一、創作

嵐(戯曲)

神様の話

K生

K生・譯稿

めばえ

ある男の終焉

國境近く(ラジオドラマ)

彼女等の秋

さあ、一緒に起ちませう、外一篇

一、詩

ひからびた風景

たいだあ

秋

篠垣 鐵夫

青木 實

曲 傳 和

T. O.

西條 明子

阿武 一洗二

大藤 彌

近東 綺十郎

英 精男

中島 嵐兒

島崎 恭爾

山中 一

一、短歌

秋の渚

神場 磨須子

秋

甲斐 水俣

歌壇

山崎かすみ、谷岡智子、森筆野、岩野豊子、橋口裕子、濱田松代

二、論 文

植民地文學のために

星野 てつ

何を爲すべきか？

新藤 賢太郎

出漢はいかに轉變したか？（2）

吳 士 星

一、研 究

ロシア研究書三つ

L—M—STO

近代詩に及ぼせる Donne の影響

安達 義信 譯

二、報告、通信

理想都市建設

アラン・S・オウスマイン 星野てつ 譯

沿線通信

滿洲文藝文化報告

このうち、篠垣鐵夫、青木實の兩作品はやはり相當に傾向的なものであつた。

曲傳和といふのは、のちに青年書局を経営した曲傳政の弟で、當時、關東州の小學教員だつた。

（今は、河南省の建設廳長とかをやつてゐると聞いた。この「K生」といふ小説は、上段に原文を掲げ、下段に「T・O」と署名した筆者の日譯を掲げたもので、滿洲文學の一つの新しい發表形式の試みと言へたと思ふ。

西隆明子とは、後「月刊滿洲」などに「未亡人論」その他で氣を吐いた、當時の安藤光子のペンネームである。彼女、日本の古典に詳しく、明眸、近代性を持った女史で、一方には川柳などもつくり、筆者は親しく交際してゐた。彼女、松岡鐵枝などといふ逞しい女性とともに、滿洲婦人文化のために當時努めたものであつた。彼女たちによつて出された刊行物もある。：：目下、川口姓の人となり、新京に幸福であると聞く。

ラジオドラマの大藤瀧は大内隆雄の別な筆名。（後藤、近東、篠垣、小生らで、大連放送局から何度かラジオドラマ放送をやつたこともあつた）なほ「滿洲文藝文化報告」の中に、次のやうな一節がある。當時の滿洲文學の一面を傳へるものである。

「中國の文化問題」對して新しく創刊された『滿洲評論』が毎號記事を載せてゐるのは良い。我々はそのやうな資料をこそ求めてゐるが、青年聯盟の内輪の事などは同誌から追放して貰ひたい。

「協和」の文藝は一向振はない。九月十五日號の如き募集實話物で逃げてゐるが、あの澤山の記事の中で我々の胸を搏つのは「下級社員的生活相——家族手當の半減について」一つである。大高岩夫氏の「上海に於ける工場労働者の日常生活」があるが、平板な記述であつて積極的價值は見出されない。

「新天地」は文藝欄を失つたやうだ。「滿蒙」も近頃創作を載せない。「合萌」「滿洲短歌」はそれ／＼やつてゐるやうだが近頃はちつとも社會的影響を與へることもない。

滿鐵圖書館發行『書香』は時々良いものを載せる。九月號、佐藤通男氏の『聯農氏文學に就いて』書いたものはその一例である。

こゝで少しく、その頃の滿系文學を一瞥して置こう。

一九二六年の夏、春潮社といふ文學團體が奉天で組織された。それには南滿、北滿の人々も参加

した。その幹部は周筠溪、周寒憐等であつた。それが主張したのは民衆藝術であつた。刊行物として『漫聲』といふのを出した。

がこの團體は翌年春自動的に解散になつた。『漫聲』は一號を出した切りだつた。しかしこの團體の分子は各新聞でその作品を發表して行つた。

一九二六年から二八年へかけて、滿洲各新聞の副刊はみな新しい作品を掲載した。盛京時報の『紫陌』や、民報、晨光報、新亞日報の副刊である。二七年の秋には、新亞日報は『綠痕』を出し、奉天の商工日報も『文學副刊』を附録として出した。新人作家には、王一葉、孫孛生、楊一、張弓、張笑濤、王韻綠、新苑女士等があつた。

この期の作品は前の期に比べて進歩してゐたのは内容が比較的充實してゐたことであつた。題材も以前のやうに戀愛一色には限られてゐなかつた。そこには新しい進路といふものが目指されてゐることが知られた。

一九二八年の夏には、東北文學研究會といふ文學團體が組織された。その首脳部には王一葉等があつた。

この外、東北大學の學生たちによつて『夜鶯』といふ定期刊行物が發行された。張士馬は『長虹』

を出した。宋葉は「關外」を出した。

その外、國際協報、泰東日報の副刊も改新された。延吉の民聲報の副刊「荒原」の作品は殊に尖鋭であつた。要するに、社會の新しい變化に應じて、新興文學の思潮が滿洲の文藝界に流れ始めたのであつた。その意識は必ずしも正確でなく、取材と技巧また十分ではなかつたが、このやうな變化は注目に値するものであつた。

一九二九年になると、多くの作品が現れるやうになつた。單行本も種々刊行された。趙鮮文の「昭陵紅葉」、林霽融の「鮮血」、張露薇の「情歌」等みなこの年に出たものであつた。

この時期、作者も大いに増加した。彼等が示したイデオロギ―は、表面から見れば甚だ複雑であつたが、詳しく考へると、やはり二つの流れに外ならなかつた。一つは更に一步を進めて新興文學の方に進まうとしたものであり、一つは小市民的なそれを固守したものであつた。後者は或ひは半驅を洩らし、或る者は彼等が認めて光明となすものを追求したが、その光明といふものも彼等に興へたのはただ幻滅であり悲傷であつた。

過去の作家の或る者は實生活に赴き、或る者は滑り落ち、或る者はもう續けて書かなくなつてゐた。新しく起つた作家には、張露薇、白曉光、林霽融、李別天、臥菴、朝朝、露露、董旭等があつた。

彼等はみな努めて不斷に書いた。すぐれた作品といふのは少なかつたが、量の方ではどの時期よりも多かつた。同時に各學校の刊行物も前後して刊行され、その内容は自づと文藝が主要な地位を占めてゐた。

一九三〇年になると、滿洲農村は激しい恐慌に襲はれた。當時の作家の中では、丁煥文が農村恐慌を題材とした數篇の小説を書いた。それは表現に於いて充分に巧みではなかつたが、農村の破産を全面的な滿洲の經濟の基底の動搖、この事實を作者は見、表現しようとしたのであつた。

この年の春、泰東日報は「文藝週刊」を出した。それには比較的好い作家が網羅されてゐた。發表された作品の殆んどは甚だ尖鋭なものであつた。その中でも微露の「白村的風光」など注目されるべきものであつた。

これを總説するに、滿洲文學の發動期は五四運動の後であつた。初期の色彩は全く小市民的であつた。やがて文藝團體も組織されるに至つた。時代の進展につれて、小市民中に分化が行はれ、新興文學を唱へる者も出て來た。

内容から言へば、この期の作品の多くは空虚であつた、何もつかんだものがなかつた。しかし滿洲で意義ある材料をつかむことは決して困難ではない。しかしこの期の作品にこのやうな材料を生かして

た作品は幾つと存しない。それは作家の社會を見る力が足らず、思想的にも徹底してゐなかつたからである。技巧の上に於いても、未熟であつた。文藝批評も不充分であつたと言はざるを得ない。

こゝで滿洲事變となる。

「この直後、或る事件のためにかなりの文藝人が暫らく不自由な境涯に置かれたといふ出来事があつた。

昭和七年の三月に『滿洲文藝年誌』といふものが、滿洲文藝年誌刊行會から刊行されてゐるが、これは右の事件の後にまた空隙を埋めるために企畫されたものであり、また自づとそれまでの滿洲文學に一つのしめくくりをつけたものともなつたのであつた。

その内容は――

詩

白の倫理他三篇

地理學圖表他四篇

五月他一篇

安達 義信

稻葉 亨二

柿沼 實

水車他一篇

黒麥酒の歌他五篇

肩章の星他四篇

ひからびた風景他一篇

秋の歌一篇

理髮舖他三篇

主 活

小杉 茂樹

城 小確

高木 恭造

中島 風兒

英 靖男

古川 賢一郎

南紫 偶緒

論 文

與謝野晶子論

プロレタリア文藝の一翼として短詩無産川柳を提唱

新興川柳

創作八句

辛未創作

甲斐水棹子

渡 研吉

渡 研吉

渡 研吉

大島 壽明

一七三

叫ぶ蝶頭

御時維感と創作十句

創作十句

自選句

一七四

堤 水叫坊

大河平蛙酒

大河平吐詩子

小林 嘯鳥

佐藤 斗南

高木 満山

永井 草明

長谷川 路屍

矢原 夢瀬舟

渡邊 雨明

菱田 世紀

阿武 洗二

青木 汎郎

古佛庵句抄

小説

或る日の下級生

フレンジャーチ

選力計

稻荷 雅堂

佐々木 三福

白井 鼠堂

筒井 酒人

中村 銀糸

宮崎 竹州

山元 不動

青木 實

岸根 正雄

大内 隆雄

大谷 武男

曲傳和

近東 綺十郎

介崎 徹

近藤 義長

志野 羊吉

高尾 雄二

高橋 順四郎

中村 秀男

西條 明子

長谷川 泰造譯

愚談

凍夜

生活の片鱗

百合

往事

北滿平康里の女

萌芽は地殻を破つて

亂れ花

童話作家になぜなつた

今日及び今日の横顔

殘された苦力、宋

大きなお人形

ピラ

鏡(ドーデニ作)

一七五

滿洲文藝運動史
滿洲文藝家名簿

いま本書を觀みて、興味があるのは、この附録の部分であらう。「滿洲文藝運動史」は實は筆者が書いたものであつた。

「滿洲文藝年誌」の實際の仕事をやつたのは車村秀男で、近東壽十郎がこれを助けた。

この刊行物企畫の協助者に、上記執筆者以外に、柴田天馬、城島徳善、西卷透二（井田渡二）、村岡祥太郎（樂童）などがゐた。西卷、村岡はすでに故人だが、その頃の滿洲文化界に働いた人物であつた。

外に文藝家名簿中に、藤山一雄、早川正雄、石森延男、丘巖二、白藤六郎、齊山捨夫、元木瑞枝、藤森圓郷、高山峻峰、平野博三、永賀見太郎、和氣傳、石原秋郎、長谷川兼太郎、小田島興三、三井鶴吉、小澤開策、田中總一郎、栗栖義助等の名が見えてゐる。彼等また初期滿洲文學の援助者、同情者等であつた。

第十一章 滿洲事變と文藝界、高梁、創刊

滿洲事變——昭和六年（皇紀二五九一年）九月十八日

今にして思へば、この時を境として滿洲文化史も劇然新しい段階へ突き進んで行つたのであつた。筆者はこの頃滿鐵にゐて、なほ善可を得て「滿洲評論」の同人となつてゐた。最初は専ら大塚令二が編輯に當つたが、彼は昭和七年初頭北京に轉勤し、そこで筆者が二代目の編輯者の仕事をやることになつた。

まことに目まぐるしい時代であつた。滿鐵では經濟調査會といふのが出来、私はその資料編纂班主任を命ぜられ「滿鐵調査月報」の編輯をやることとなつた。經濟調査會の働き手連中は多く奉天に進出してゐた。私は何度も奉天に出張した。一方、若い滿鐵社員で外國の雜誌類を讀む會——二十日會といふのがあつて、そこでも月刊の報告を出してゐた。私は忙しく二人、三つの刊行物の編輯をやつ

たのであつた。殊に『滿洲評論』は週刊であり、普通號三十二頁であるが、印刷は小さい印刷所であつて居り、ために随分多忙な思ひをしなければならなかつた。全く、好きでなくては出来ないことだつたらう。

外は急轉變化する情勢、私としてはさういふ止事の中にあつて、しかもこの年上海へ行つたり、東京へ行つたりした。雑誌『改造』の特別附録『最新滿洲辭典』の編纂などもやつたのだつた。——さうした事情のゆゑでもあらう、文學方面でのあまり詳しい記憶が今は殆んどないのである。尤も、多かれ少なかれ誰しもがさうした時勢の暴風雨の中に捲き込まれてゐたのであらう。

それでも、『滿洲評論』昭和七年四月十六日號には『滿洲文化建設私案』T、O生の小文がある。

「これは奔放な空想である。だが、少しのヒントをでも與へ得たならと考へる、執筆の動機は現實的なものである。

第一に、滿洲には各種の民族が雜居してゐる、そしてその文化の程度も違つてゐる。異なる色彩の民族文化の存在は眼前の事實であつて無視することは出来ない。(社會主義ソ聯を見よ、各民族

はその特有の文化をます／＼發展せしめつゝある)

普通教育に必要な最大の注意點は、民族融和精神的浸透——いはば社會連帯心の養成であらう。侵略主義を排せよ、また卑屈な排外主義を厭するがよい。尤も、この根本には、各民族の實際生活に於ける平等がなければならぬのだが。——經濟的にも、政治的にも。

一の共通語の普及は、極めて有益であるだらう。私は、それには支那語とエスペラントとを推す數に於ける支那文化(支那語)の優越と、補助語の利用。

中等教育、そして専門教育は尙更ら、單なるインテリの培養であつてはならぬ。分化した、實際人を養へ。農、工、商各方面に、本當に土に立つて、事業に向つて働き得る人間をつくれ。封建的な、乃至アジア的な官僚は不要だ。

一つの、最高研究院が造らるべきだ。自然科学と、社會科學とのそれは、潤澤な經費を與へられ、研究の自由が與へられねばならぬ。研究員はあくまでも研究の自由、身分の保證を認められねばならぬ。

宗教。自由なるべし。行政事項より完全に分離すること。

文化の領域に於ける、各種の出版は優越した保護を與へられていい。これにも内容の自由を與へ

よ。新聞、雑誌の發行を容易にし、内容に出来るだけの自由を欲する。今の暫時の過渡期が過ぎたら、大衆は眞剣に、言論、出版、讀書の自由を要求するであらう。

藝術。國際成果の包摂と、郷土的(民族的)創造の伸張。それが大切だ。演劇、音楽、映畫、ラヂオを最大限に利用し役立てよ。「公立劇場」があつて「巡回」する方がいい。映畫、ラヂオは特に當面、發展させるべきだ」

右の如きもので、些が當時流行の語彙などもあるが、主旨は大體認められてよいものであらう。その後實現してゐるものもあり、さうでないものもある。ともあれ、建國當初の頃にあつても、われわれは滿洲の新しい文化といふことに決して無關心ではなかつたのである。

昭和七年四月、五月の『滿蒙』に大庭武年が戯曲「張學良」を發表してゐる。大庭武年は日本の『青年』に特異さを持つた探偵小説を發表したりして、一部に知られてゐた。滿洲日日新聞にやはり探偵小説趣味を盛つたやうな小説を連載してゐて、それが何かの事情で中絶したこともあつた。

また『滿蒙』同年一月號には、田中總一郎の戯曲「馬占山の嶺」といふのが出てゐる。(その前、

同誌昭和六年十一月號に「故郷」といふ戯曲を田中氏は發表してゐる。)その愛妻と大連にやつて來た田中氏はその後ジャーナリスト生活に入つて行つたやうだが、戯曲の世界への郷愁は深いものがあつたのであらう。

後年「鶴越分隊」を書いた田中氏は『滿蒙』の昭和七年二月號にメロドラマ「甯行列車」なるものを發表してゐる。

大庭武年はまた同誌七年七月號に「凱歌あがる下」⁽¹⁾といふのを書いてゐる。

近東綺十郎が七年三月號に「女學生陳青娥の更生」といふのを書いてゐる。

『新天地』には谷川らん、宮原麻婆どがやはり多く書いてゐたと思ふ。

なほ藤光下らが『瀋陽女人文學集』といふ本を出したのもこの頃だつた筈である。それには松岡綾枝君が郭沫若の戯曲翻譯を載せてゐた。

近東綺十郎は大連で演劇運動をやつてゐた。その後、奉天に移つて行き、新聞記者になつた。

昭和七年九月、與一君の「高粱」が創刊されてゐる。

創刊號の巻頭に西田悟朗の「滿洲文藝家諸賢に寄す」といふ一文がある。その頃の事情を知るのは好い資料であると思ふが、こゝに寫して見る。

「世界視聽を一點に集めてゐる滿洲に我々は棲息してゐる。

我々の生活から湧き出る文藝的素成が我々に沈黙を許さない。人間は言葉をもつてゐる。——これが人間的特徴でもある。我々の生命は活動してゐる。そして自己保存の本能を主張せずにはゐられない。この絶大なる生活力を持つ我々は此處に文化水準昇揚へ一大發展に盡力せんことを期して、文藝誌高粱の名のもとに、一小誌を汎く滿洲在住の諸賢に送り出さんとしてゐる。

請ふ。諸賢の誠意ある批判と鞭撻の程を。

雑誌「曙人」は六號をもつて廢刊に至つた——花々しい文藝史を残して——。

筆者はその歴史の詳細には暗いものである。が然し、遅々たる滿洲文藝の動きの中に、躍進の目

ざましきもののありしを否定し得ない。唯悲しむ。餘りにも、天折とは云へその期の早かりしを。

滿洲文藝界の現状は死の曠野を彷徨する放浪人のそのの様に、その足取りは見られたものでない。見る者をして、冷汗を——。

悲しき哉。悲しき哉。

けれど、我々希望と或る程度の將來の期待に、心を踊らせる若き青年達は悲歎に暮れてはゐない。常に飛躍をモットーとして突進してゐる。機關車の發進の如くに、生氣が溢れてゐる。生命の躍動を胸に感じつゝ、文化貢獻のために、勢力を打ち込んで、ユートピア建造の努力に快感を覺えるものである。

我々の前には、特別な確固たる道が開けてゐるわけではない。従つて、我々の盛りあげる文藝作品は、自由なる分野の中を走り廻る自由を持つてゐる。即ち我々は統制ある傾向のもとに走ることとはあり得ない。自由の成長こそ人間の熱望であるから。然し、文藝といふものが、作者の生活を通しての生産であるから、類似の生活條件のもとにおかれた我々の生活であるから、計らずも傾向の一致を見るかも知れない。その如き結果になつたら、それは偶然的一致で、計畫的のものではない。之を要するに、我々の小誌は傾向を持たずに只管文藝道を進むといふスローガンのもとに發展

して行く。——と此處に宣言して置く。

一八四

滿洲には滿洲の文藝を。

木下圭太郎氏を中心とする、醫大文藝部主催の座談會にて、氏は云はれた。日本人が内地から折角滿洲迄来て、何年か後には再び内地に歸る。日本人は何故滿洲に永住しないのであろうか。その原因は又種々であらう、その一原因として、滿洲の地方色をもつた、繪畫にせよ、文學にせよ、優美なる作品がないからではないか？

滿洲をバックとした優れた作品を通して、滿洲の印象がすぐ浮ぶ様な親しみを持たねばならない。滿鐵あたりで率先して、内地の見込める作家を滿洲に呼んで五年でも六年でもその生活を保證して、よき文學製作の道を開くことが必要であると力説されてゐた。——筆者はこの考へ方全部を無條件で承認し得ないものではあるが、その目的に於て一致する。我々は必ずしも内地の作家に力をかりる必要はない。我々は恵まれた条件下に生存してゐるではないか。この眞實の滿洲に生存する我々がその目的の貫徹のために出来る限りの勢力を傾けることは、又重大使命ではないだらうか？

從來の滿洲文藝作品を見るに、それ等が餘りに、内地の思ひ出に耽り過ぎてゐたり、内地作家の模倣に現夢を抜かしてゐた。或る時にはマンネリズムに、自分の個性をも忘却してゐたではないだらうか？と云ふて、筆者自身理論的には此處まで到達したのではあるが、現實において撞着を悔ひるものであることを告白す。

最近の滿洲文藝に就いて——。

筆者は實際範圍が極めて狭小であるから、視野に觸れないものもあるかも知れないが知つてゐる範圍に於て一言して置きたい。何と云ふても、滿洲文藝の現状は見苦しき凋落にある。活潑なる文藝雜誌は一冊と雖も店頭で發見し得ない。萎縮せる現狀に至つた原因に就いては視野の狭い筆者には測り得ない所が多々あるであらう。然し過去に於て、幾多機關誌の歴史を持つ、小なりと雖も滿洲文藝界である。

積極的な努力の前には、復活も絶望ではないと信ずる。現在、勢力は小ではあるが、奉天毎日の文藝欄が孤立的に、活躍してゐる、二三年前は見るとなき影もなかつたが、最近一年間に於て、可成りな進歩を見せた。何回か机上検討を経て今日に至つてゐる。まだまだ成長の過程である、諸賢の壓倒的な反響をもつて、成長の促進の参加が必要である。特に大連の諸賢は、滿洲の地理的に

僅かなパーセンテージの所有者である大連を、恰も滿洲文壇は大連以外にはないと、自惚れずに、視野の擴大につとめられんことを。この他に新聞紙としては、大連新聞が形式的に、チャンバラ講談の後に文藝的なるものを、おしこめてゐるが、あんな人を食つた態度では、云々する氣概も湧いては来ない、編輯者の責任を問ひ自覺を促すものである、この他に雑誌として、新天地、協和、月刊撫順がある。協和は比較的誠意をもつて、文藝の編輯に心を入れて呉れてゐるが、月刊撫順は、廢物的なエログロに溺酔してゐて救ひ出すべき術もない。新天地に於ては、紙面の少ないのが欠點ではあるが、僅かに誠意の片鱗を見る。

結局滿洲のチャーナリズムは文藝に對して、冷淡であるから、それ等を刺戟する文藝中心の雑誌を文藝界が持つ必要がある。

定期ではないが最近のもので、滿洲文藝年誌なるものがある。大連を中心とするもので、得る所は少なかつた、第一あんな高價では仕方がない、それと青木島田氏の發行の『彩』を見た。感じのよい本だと思つた。唯内容の少ないのが惜しい。これも經濟問題であるのだからあれ以上の要求は無理であらう。

この西田悟朗とはどんな人だつたか私は殆んど知らないが、その後「吉岡文枝のこと」「變り者」等の小説を同誌に發表してゐる。

雑誌『高梁』については、奥がその一周年記念號に「たどつて来た道——一ケ年の思ひ出」といふ一文を書いてゐる。それから抜き書きして見よう。

高梁も今月號で滿一ケ年を迎へた。

一年、私はそれを考へると實に感慨無量なものがある。

四月、初めて滿洲の土を踏んだ私は當時市内雙發洋行の店員だつた。

馬糞とほこりの町新京、毎日印刷物を自轉車に積んで華客先へ配達した。

一二ヶ月はあはたしく過ぎた。珍らしさと忙しさの中に、お、やうやく落付くと本を讀まぬ物足りなさが、駄文を書かぬ淋しさが襲つて來た。

私はよく僅かの時間を偷んでは書店をあさり歩いた。

だが私を喜ばせる様な滿洲の文藝を盛つた雑誌がなつた。

「満洲には文藝雑誌がないのだからか」大連の書店に照介して見ると「今の所一つもない」との返事だ。

「今の所」この意味を私は「過去にはあつたが今はない」と「まだ一つもないから誰か一つやつて見ないか」と云ふのと二つの意味に解釋した。

一つやつて見ようが……と考へたのが六月の中旬だつたらう。

「一つ俺が文藝雑誌を出そうと思つてゐるんだが」

「そいつア面白からう」と言つたのが今は政府の印刷局にゐる、當時同僚だつた北村といふ、これも好きな男。

何か藝術的で満洲を連想させるいゝ名がないだらうか。

で、二三日二人で考へた。

「赤い夕陽」「新京」「新興満洲」「満洲藝術」およそ十ばかりあつたらう。「赤い夕陽」はお伽話だ、何だかだで結局一つもいゝのがなかつた。

或日町を歩くと支那人乞食が赤い飯を食つてゐた。

何だと聞くと高粱だと言つた。

高粱、高粱、文藝雑誌高粱。私は何度も繰返して言つて見た。(中略)

「高粱……そりやいゝ」

で雑誌名は高粱と決定した。

發行者に主人の名を借りて早速出版物許可願を關東廳に提出した。

奉天毎日と北滿日報(今の新京日報)に原稿募集の廣告をした。一週間も経つと未知の人達から激勵の手紙が来た。私は嬉しかつた。

一月月たつと原稿もぼつ／＼集つて来た。「雑誌なんてペラボウに金のかゝるもんだからよせ」なんて注意してくれた人もあつた。

「金なんかどうにかならア」もう私はやる事は出来ない。原稿を、手紙を何度も何度も讀み返しては、どうあつてもやるといふ決心を固めた。

その頃奉天督大文藝部(影島豐範氏)だと思ふが、今生憎昨年(1934)の日記を持つてゐないので、原稿を集めてわざと訪ねて来た。

「我々グループとして高粱には非常に期待をかけてゐるんだからしつかりやつてくれ」と云つて歸つた。

あとは只許可を待つばかり。

(中略) きたない支那宿の一室、そこで私は原稿の整理をしながら許可を待った。

一ヶ月半、「まだ出きないのか」「何してるんだ」なんて、厳しい使りもあつた。

もうじつとしてはいられなかつた。警察で聞くと、内地の方の身許調査が遅れてゐるんだとの話、でもなるべく許可しない方針なんて言つてるんだから若しも許可にならなかつたらどうしようなんて考へてゐる時、やうやく二ヶ月ぶりで許可が下つた。

私達はコオドリして喜んだ。

さて 創刊號が出来上つた。用紙は更紙、六十頁、至つて貧弱なものだつたが、でも嬉しかつた。

これが恐らく新京で、雑誌と名のつく物の出た最初であつたらう、(これから五月遅れて政治經濟雜誌「滿洲改選」が出た。)

創刊號は杉島豊比古の「をばさん追放」稲垣隆氏の「副行循環経路」丘はるみの「蠅」だつたと記憶する。

十月號、一冊にまとめるだけの原稿がなかつた。次に經費の問題があつた。むりに出して出せ

ぬ事はなかつたが十一月號で仲ひる積りで休刊した。

十一月號を眼の前にひかへ私は積極的に廣告も集め、雑誌をよくする考へで、適當な家が見つかるまで事務所を置かせてもらう事にして雙發洋行を退社した、店主新井氏はその時百圓ばかりの金をくれた。私は涙が出る程嬉しかつた。(其の後も百圓ばかり補助してくれた。)

その頃元資政局長の笠木良明氏の「滿洲國獨立の精神」を某氏の斡旋で發行權をもらつた。四六版百二十頁、眞に滿洲國を思ふ切々の眞情を披瀝した快男子彼、笠木氏の書だけに實によく賣れた。書店なんかでも、五十冊積んであるのが僅か十日か半月で賣れ盡したんだから。

十一月號、これは割合によく出来た。表紙も効果的だつた。内容は忘れたが岸崎ハチロー氏の「國際四等列車」山谷三郎氏の「高粱」があつた。

(後略)

「高粱」は昭和七年の十月、八年の四、五月を休んで九月一周年記念號までに十冊を出してゐるわけである。主なる文藝ものの執筆者に、杉島豊比古、鈴木濟、岡田廣美、山谷三郎、室町哲二、木曾

川徹、近東綺十郎、網活隆夫、中村秀男、紫苑等がある。ほかに志村夏江といふのが活躍してゐるがこれは今元久Ⅱ網活隆夫と同一人と私は睨んでゐる。

八年七月號に東野聖太郎の「文藝二三」といふのがあり、それには大連を中心とした『移民文學』『大陸文學』『燕人街』『赫土文學』、奉天の『曙人』、そして滿洲文藝研究會の『滿パン』等の推移の跡を述べ、近狀として、大衆派の白石義夫、大庭武年、藝術派の近東綺十郎、青木實、安達義信、小杉茂樹などが「相當文藝的成果をおさめてゐる」との記述がある。

また「文藝ニユース」に雑誌『新京』の創作欄が壓縮されたとの記事がある。それから、佐和山一郎らが文藝雑誌を出さうと計畫してゐるとの噂が載つてゐる。

八月號には高尾憲太郎が『滿洲公論』から『滿蒙評論』に移り、鈴木啓佐吉が『滿洲公論』に入つたとの記事がある。

第十二章 『高梁』のその後、『作文』その他

『高梁』が創刊されたのが昭和七年九月、まだ長春時代であつた。

『作文』は昭和十七年末に終刊號を出したが、それを見ると、作文社は十一年間活動して來たところ。

すると、『作文』の前身とも言ふべき『彩』の頃から數ふべきものであらう。

『彩』には昭和七年二月に發行されて居り、その執筆者は古川賢一郎、城小雄、三宅豊子、橋本英子、大谷武男、竹内正一、近東綺十郎、青木實、島田幸二である。

前章に書いた『滿洲女流文藝集』は滿洲新女性會が『滿洲婦人問題論集』に次ぐパンフレットとして昭和七年十二月に出したもので、執筆者は、笠原正江、相原菊、下村梢、宮崎智恵子、波奈加根子、甲斐水棹、遠藤輝子、西條明子、三沼柳子、冬木敏子、大内隆雄であつた。(相原菊は網野菊で、當

時奉天にゐた、「ノートから」といふ隨筆で、觀た映畫や讀んだ小説についての感想を書いたものであつた。大内のは特別寄稿で「文藝上の在滿婦人の業績」といふ一文だつた。

ところで、天內隆雄は昭和八年三月大連を去つて東京へ行き、同年末奉天にかへり翌年いつばい奉天にゐて、昭和十年二月今は新京となつた、彼の第二の故郷へ歸つて來た。この間まる二年、内外の事情から彼は文藝、文筆から全く遠ざかつてゐた。「高粱」のことなどもあまりよく知らなかつた。奉天にゐた近東綺十郎は入れ違ひに東京に行つてしまつてゐた。

が、北に「高粱」あり、南に「作文」ありと言へ、當時の滿洲文學はあまり振はなかつたと見るべきであらう。僅かに「滿蒙」に昭和八年中に大庭武年が創作「故國」戯曲「烽火」同「清朝終焉」同「馬占山」を書き、九年に戯曲「滿洲開基」「蔣介石」同「劉愛護村長」を書いてゐるくらゐが記録されるだけである。しかし雑誌が廣い讀者層を持たなかつたせゐるか、あまり世評にも上らなかつたやうである。なほ「滿蒙」八年十二月號には近東綺十郎が小説「間諜茉莉」を寄せてゐる。なほこの頃の「滿蒙」には大高巖、松井秀吉らの支那文學研究ものが出てゐる。

ところで、「高粱」にかへらう。

高粱社からは昭和八年、二つの單行本が出てゐる。奥富美子遺著歌集『夢の園に戯れし蝶』と、岡田廣美の小説集『大陸の旗』である。

その後の『高粱』では、和波薫、佐和山一郎などが登場し、八年四月には青木實、同八月には近東綺十郎が稿を寄せてゐる。

また高粱社を背景に滿洲文藝家協會が結成された由である。それに關聯して八年三月號に寄せた西藤辰雄の一文があるが、その中に「現在滿洲國側の文藝作品を日文に譯し在滿日本文藝家の作品を滿洲に譯して日滿の新聞雜誌に掲載し或ひは更に適當なる方法によつて發表する等の文藝を通じての日滿の精神的融合等の企ては多く行はれてゐないと聞くが、斯る國家的意義を有する文化工作は之れを國家に於て助成の要がありはせぬか。世界各國に於ける國家機關と文藝との關係、近くは日本文藝院設立の議等文化の高揚と共に文藝の國家に對する關係は至大なるものがあることは論を俟たぬところである。滿洲國政府當局に於ても滿洲の文藝愛好家各位に於ても滿洲文藝の前途に就いては關心を要するものがありはせぬだらうか」と言つてゐるのは卓見であつたとしなくてはならない。

岡田廣美が四月號に書いてゐる所によれば、當時、哈爾濱日日新聞には葉野紫苑、その他北滿在住

者の作品が出、哈爾濱新聞には平佐二郎、小田切、鈴木等の隨筆、短歌、詩が出た、『新京』には佐和山、富美らの作品が出、また「文壇月評」が良心的だ、『滿洲改造』は今九久が編輯して居り、募集作品が出てゐる。『大滿蒙』には會つて文藝欄があつたが、今はない、なほ新京劇研究會といふのがあつて、宮部、池邊、會田、和波、山岸らがある。四平街には帆足潮がある、奉天新聞では近東が活躍し、相川、白石も書く、安東に小田、宮本がある云々といふ。

なほ同號に三月に催して文藝座談會の記事があるが、出席者は奥一、西山俊、西藤辰雄、赤平達彌、岡田廣美、室町哲二、北村茂、飯島英一その他であつた。

五月號を見ると、近東綺十郎の滿洲ペン俱樂部の企畫書が出てゐる。近東は東京へ行つてゐて、正しい滿洲の姿を、日本の大衆に認識させることは、何ものにもまして大きな、力強い日滿親善への文化運動である。地理的に不遇な滿洲に在つて日本進出を企圖しつつある在滿文藝家は先づ滿洲それ自體の内に於いてお互に手を握り合ひ團結しなければならぬ。我々がこの滿洲ペン俱樂部を創設せんとする野望否意圖は、文筆による日滿親善への貢献と、在滿文藝家の結成及びそれによる日本文壇への進出を期するの三つの意義に依る」との趣旨でこの計畫を立てたのであつた。そして若干の仕事はやつたが、時不利か、協力熟せずが、翌春、彼は滿洲に舞ひて戻つて來ることとなつた。

九月號に佐和山一郎の一文があるが、それによると和波葉が大滿蒙の文藝欄をやることになり、彼の外に、佐藤光、花戸章、池邊青季などが書いたとある。花戸章とは佐々木文哉である。

『高粱』はこの年の八月『滿文高粱』を附録として出した。あまり新味ある内容は見られなかつたやうだが、企てとして注目されるべきことであつたと思ふ。

さて、昭和九年には、大連で『蒙義』といふ人が『黎明滿洲』といふのを刊行してゐる。創刊號には鈴木啓佐吉が協力した由で、それには藤平田文吉、末光高義、西村不二、井上紅梅、中溝新一、大川周三、竹内正一、中島荒登等が執筆した。しかし、この雑誌は創刊號は立派であつたが、その後質が落ち、やがて廢刊した由である。

昭和九年八月、大連で滿洲ペン俱樂部といふのが出来た。これは近東綺十郎が計畫したそれとは別個のものである。この大連の滿洲ペン俱樂部は、大木一男（大阪商船會社大連支店にゐた）、古川哲二郎（賢一郎の弟）、鈴木啓佐吉、柳中久良人（これが現在の北尾陽三である）、横澤宏、樋口春是（詩人、大連新聞の工場の方にゐた、のち病死した）、齋藤和郎（雑誌『大陸』にゐた）等で結成さ

れた。のちには宮川靖、吉野治夫、佐々木勝造、加藤裕明、岡二郎、西村真一郎等も参加し、昭和十年十二月以降、數回に亘り雑誌『滿洲評論』を舞台として特輯の『滿洲ペン俱樂部』を出した。吉川哲二郎は武禮葉之輔、横澤宏は松憲、大木一男は田耕之介の筆名を使つた。大木はのち大阪へ轉じた。宮川、鈴木は新京へ轉じた。

大連で文話會がのち出来るやうになつたのは、この滿洲ペン俱樂部がその母體みたいなものになつたのだと考へられる。

昭和十年¹¹⁵に入る。大同三年、¹¹⁴康徳元年である。

前に記したやうに、私はこの年二月、新京に歸つて來、新京日日新聞で働くこととなつた。それは會つての長春實業新聞である。社主は染合保藏、總務が十河榮忠、編輯局長が松本勇。

佐々木文哉が整理をやつてゐ、やがて近東綺十郎を私は呼び、和波董も入つて來た。私と近東と和波、これが新日三羽鳥などと稱られて、暴れ廻つたのであつた。

新京日日の文藝欄はトタンに活氣づき、忽ちにラヂオドラマ研究会が出来て當時南廣場にあつた假スタヂオから放送をやり、文藝座談會なども何回かやつた。協和會には佐藤岩之進、池邊清季、曾田

などがゐ、情報處には鶴谷利一、岡田益吉などが青藤葉一のもとにゐた。今元久は『滿洲改造』に據り、やがて雑誌『新京』も青井、小原の手に移つて面目を一新して來る。

奥一先生とどうして知り合つたか記憶が定かでない。私が訪ねて行つたやうにも思ふが、和波か近東か紹介したのが最初だつたかも知れぬ。それとも座談會でも顔を合せたのだつたか。

『高粱』九月號に、私は頌平作「追憶断片」といふ譯詩を寄せてゐる。それが『高粱』への私の最初の寄稿であつた。それは前年出た『曉鐘』といふ滿文雜誌から採つたものであつた。

(私は、この頃から漸く滿系文學に對する熱情を募つて來たのであつた。すつと以前から心がけ注意はして來たのだつたが、今や私のなすべき仕事の一つは確かにこの方面にあるといふことを信ずるやうになつて來たのだつた。——この年の八月の『滿蒙』には、私は致泉作の小説「祖母」を譯して寄稿してゐる。そして、この致泉とは、今の石軍なのである。——私はだん／＼譯に力を入れはじめたのであつた。)

『高粱』の經營がどうも思ふやうに行かない、もつとくだけて、豊富な内容で行きたいといふ議が起つた。よからう、賛成だ——そんなことを、あの頃の喫茶バー「ナナ」あたりで一同で決めたのだつたらうと思ふ。斯うして出來たのが、『高粱』十月號

露西亞墓地の秋……海拉爾の思出

秋草の想出

秋の女

紅いドレスを着た女

東部線の匂ひ

すしの感傷

名馬の歌(蒙古民謡)

文藝家とダンサーの座談會

文藝家側、大内隆雄、近東綺十郎、佐和山一郎、細川明、今元久

ダンサー側、篠原美好、柴田マミィ、今村久米子、小林光子(以上新東京會館)千葉一子、柳律子(以上キヤピタル)

社側・奥一

九月の文藝界

國都戀愛第一課(國都映畫研究會製作、小型劇映畫紹介)

吉見 明

佐和山 一郎

群家 陸夫

山谷 三郎

今元 久

和田 郁夫

西藤 辰雄

彫 像

ラヂオドラマ「秋櫻」紹介

映畫のページ

映畫雜誌から

私の映畫批評

十四行詩

秋の夜

秋の胡風樂(連載)

赤平滿スケッチ集

滿洲踊り場風景

十月のレコード界

川崎ちよ子

江 來 蘭

耶 磨

遠藤 輝子

田賀 路朗

近東綺十郎

大内 隆雄

といふ賑やかな編輯であつた。ところが、これが『高粱』最終號となつてしまつた。何とも遺憾千萬なことであつた。右のうち、群家陸夫は近東、和田郁夫と江來蘭は和波、耶磨は大内である。ダンサーの内、篠原は讀書家として知られ、今村は小説を書き、千葉も読み書く、柳は演劇界出身ぞつ

た。小林は今、新京の酒場「光」をやつてゐる。
また、右の「九月の文藝界」を読むと、次のやうなことが知られる。

○日々文藝座談會

九月一日新京日本文藝部主催同社會議場で開催

集る者、泉芳雄、稻垣輝安、大塚正雄、根本誠一郎、今元久、高木恭造、奥一、西川正光、和波、近東、佐和山の諸氏

○『吾が鎮魂歌』發行

新京滿鐵病院高木恭造氏著詩集

『吾が鎮魂歌』一〇〇部限定版東京椎の木社より發行、七〇頁六十錢

○『滿洲映畫旬報』發行準備進む

新京日本橋通りに事務所を持つ合資会社滿洲映畫旬報社が、着々準備進み、十月一日より當分月二回發行する事になつた。

○日縣賞短篇小説募集

滿洲文藝界にその人ありと知られたる野武士近東綺十郎、大内隆雄のたてもつてゐる新京日日新聞文藝欄に短篇の募集が發行された。賞金一等五圓二等三圓だが選者が選者だけに賞金と云ふより自己の眞價を決定するのはこの時にありと全滿文藝人から何と百二十餘篇の応募がめり、質に於いても従來の懸賞小説に見るやうな低級なもの一篇もなくほとんど水準以上のものであつた由。

○『蒼丘』發刊さる

奉天明星ダンスホールでは同ホールダンサー達を中心した機關雜誌『蒼丘』創刊號が發刊された。騰寫版刷五十ページではあるが仲々桃色や黄色い氣炎がはかれてゐる。

○『醫科』發刊

これも奉天、醫大文藝部の福家、花澤、小澤、林など、わが『高粱』創刊當時滿腔の後援を措しなかつた人達を中心に今度待望の彼等の機關誌が出来た。内容外觀とも仲々立派なものである。

昭和十年、大連から（發行所は下關置いてゐる）『日滿春秋』といふのが出た。

二月號を見ると、大内隆雄「街の歌」、安藤光子「奉天女人風景」、佐々木三福「川柳談」、川上章子「熱河紀行」、近東綺十郎「裏切り沙里」等がある。

文學だとは自負しない、なぜなら建國十年にして、一國の代表的世界文學の水準を抜いたものが現はれるといつたことを性念には信じない。誇りと、自負を抱いて世界文學として發展すべき滿洲文學の捨て石にならうとする。「作文」同人の或る者は、勤勞者の文學をも主張する。滿洲の現實は、職場に就き、異民族の中に喰ひこんでいつて、そこに根を下ろした生活をもたない限り眞の生活者の感情は摺めないからである。滿洲文學とは國土の照應されたものでなくてはならない。地方によつて國土を異にし、異つた風習をもち、異つた言語を話す民族が分布されてをり、そのどの部分をも文學的照應がなされ、はじめてまた滿洲文學とも言はれ得るのだ。そしてこれを骨肉化して作品を爲すには、一介の旅行者では決して多くを期待出来ない。即ちこの土地に必死に生きようとする感情を抱く者に俟つて、初めて滿洲文學の門は開くのである。

同人の著作としては、詩集に、古川賢一郎著『老子降誕』『水の道』『芽柳』『蒙古十月』『貧しき化粧』。安達義信著『一月の河』。高木恭造著『まるめる』『我が鎮魂歌』『鴉の裔』小杉茂樹著『麥の花』。坂井艶司著『崖つぶちの歌』。野川隆著『九篇詩集』。

歌集に池淵鈴江著『朱の音』。三宅豐子著『七草』。

小説集として竹内正一著『水花』。日向伸夫著『第八號轉轍器』。町原幸三著『小品集』『是好日』

隨筆集としては、池淵鈴江著『渡むらさき』。青木實著『花筵』。

また同人短篇選集『廟會』。『日滿露在滿作家短篇集』『新進小説選集』『滿洲文藝年鑑』第一

一—三輯には、同人の評論、詩、小説が多數収録されてゐる。

尙植村敏夫には、『夢と愛の小説』『女の水車小舎』『惜春の賦』『クヌルプ』等々の獨逸文學の譯者がある。

近刊決定のものとしては、三宅豐子小説集『塙の歌』菅井一郎評論集『滿洲文學の表情』、竹内正一小説集『復活祭』、坂井艶司第二詩集、富田善短篇集『縮服』、高木恭造詩集『まるめる』再刻版、加納三郎評論集等々がある。

更に竹内正一の『水花』、杉茂樹の『麥の花』、吉野治夫の「手記」は當時唯一の滿洲文學賞たる第一—三回G氏文學賞を授與され、日向伸夫の『第八號轉轍器』、高木恭造の「鴉の裔」は第一回滿洲文話會賞を授與されてゐる。また改造社『文藝』推薦作品には、第一回以來最近に到るまで、富田善「沙草地」、高木恭造「田舎醫者」、秋原勝三「暮鼓」が有力なる候補作品として擧げられた。「下略」

『作文』の成果を最も單的に要約したものと云へよう。

第十三章 新京日日及び各集團

新京日日新聞で短篇小説の募集をやつたことについては前にちよつと書いた。その後も新年などにはやゝ大規模に創作、詩、短歌、俳句、川柳の募集などもやつた。さうしたことからは、常時の文藝もその寄稿も殖えて来た。

斯うして出て来た人々に、**今村久米子**、**今村榮治**、**稻垣輝安**、**下島甚三**、**庄野ふみ**、**簡聖子**、**泉徹雄**、**棚木一良**、**桃北好澄**、**大隅一雄**、**高木喜久藏**、**佐和山一郎**、**草川千童**、**遠藤美津男**、**河利政**、**西谷正夫**等々がある。無論これらの中には、他の方面ですでに活躍してゐた人もある、が、**新京日日**でデビューし、それからひろい場面へ乗り出して行つたといふ人も多い。

この頃、私は『若草』の懸賞小説に出し、入選になつたことなどもあつた。「三十路に近き」と題したもので、上海時代の生活に取材したものでつた。

大同報がこの頃、新文藝を募集してゐた。それに『**隆雄**』の名で『**北滿詩篇**』と題した満文の詩を送り一等に入選したこともあつた。この詩は**大同報社**で出した新文學選集の詩に収録されてゐる。なほこの頃、奉天の鐵路總局の若い人たちが『**蒼穹**』といふ豪華な雑誌を出したことがあつた。近東、私がラヂオドラマを寄稿したりした。

昭和十年は私には多忙な一年であつた。

前に、『**高粱**』の記事に『**滿洲映畫旬報**』発行準備進むとあるのを引用したが、この『**滿洲映畫旬報**』といふのは**温井**といふ企畫屋があつて、それに数人が共同して發行されたものだつた。**近東綺十郎**が内職にこれの編輯に當るといふので張り切つて數號を出した。四六倍判、表紙はアート紙にオフセット刷、支那の映畫女優の寫眞を入れ、歴酒たる雑誌だつた。**和田郁夫**、**小生**なども寄稿した。まだ**滿洲映畫協會**などの出来ない頃のことであるが、雑誌經營の資金路は映畫館經營者の方につながつてゐたし、續けて發行されてゐたら面白く、またそれだけの意義ある役割をも遂げたことだらうが、その内ボヤケタやうにしてポシヤツてしまつた。

この年、**佐和山一郎**が『**裸木**』を持つて来たといふことが私の日記に残つてゐる。『**高粱**』はなくなるし、新聞はあるにしろ、何か同人雑誌風ものが欲しく、そんな薄い文藝刊行物を出したのでつ

たと思ふ。

二一〇

私も近東たちと相圖つて、『滿洲文學』といふ、これは滿系同人をも糾合した文學月刊雜誌の計畫を立て、書類を當局に提出したのであつたが、これは許可にならなかつた。どうも私たち(私と近東)の前歴がたつたのらしかつた。いろいろ計畫も立ててゐたのだが、定期刊行物としての許可が得られなくては計畫の遂行は出來ず、勇圖空しく挫折する外なかつた。

その間、私は本職の新聞以外に、『滿洲評論』、『旅行滿洲』等に書いてゐた。また、大連へ奉天へ行き、その土地の文學人たちと會合を持つたりもした、『滿洲文學』實設定の計畫を立てたこともあつた。(計畫だけでおしまひになつたが) 滿洲ペン俱樂部の組織を廻策したこともあつた。(大連にあつたそれとは別個のものである。)

こゝに、その頃の刊行物について若干書いて見よう。

『蒼鷺』については、前にちよつと書いたが、それは鐵路總局青年交誼俱樂部から出されたものであつた。創刊號の出たのが、昭和十年七月。

向野元生が「卷頭言」を書き、安部慎が「發刊に際して」と「法律の文藝と文藝の法律」といふむつかしいものを書いてゐる。英雅之介とは誰なのか、「ソヴェート演劇史論」を書き、小説「第三の人生」を書き、コント「はるさめ」を書くといふ活動振り。創作欄には大庭武年が、『滿蒙』に出した。「劉愛護村長」(戯曲)を再びこゝに載せ、外に濱松精志「ふらんす人形」、浦町祐「影」がある。ラヂオドラマ脚本として既記したやうに近東綺十郎の「春夜狂奏曲」と天內隆雄の「五月の或る日」が載つてゐる。その外「蒼穹新聞」「女性の職場から」「スポーツ」「特輯詩歌譜」「エイガセクション」「歌壇」「女性」等の特別の頁を盛つた四六倍百四十頁餘の大冊。

だが、この雜誌も滑り出しはよかつたやうだが、二號か三號までであとは振はなかつたやうである。結局、職場の雜誌でありながら、一般的内容を盛らうとしたところに無理があつたのではあるまいか。雜誌の配布はそれでゐて一般化しなかつたやうであるから、明らかに矛盾があつたと思ふ。

佐和山一郎たちの集團は「新京詩人俱樂部」と名付けられてゐた。

昭和十一年六月までに『裸木』、『氷原』、『春郊』、『花香』等の不定期刊行物を出してゐる。ちよつど今の俳句の雜誌『柳絮』が、いろんな名前を出してゐるやうな行き方である。『花香』の目次は次

のやうなもの――

はなあんず

春 夢

過 渡 期

友 と 春

繪 花 譜

沙 漠 の 音 階

渡 滿 後 記

壁 泥

春 の ノ ー ト か ら

一 中 國 人 の ア ン ド レ ・ マ ル ロ オ に つ い て の 感 想

春 の 芽

二二二

服部 匡佑

伏木龍三郎

鎌田 奇洲

奈多 進

白河 諒

佐和山 一郎

岡村 邦子

池戸 五穂

室町 哲二

張 若 谷

大内隆雄 譯

皆川 董

以上のうちははじめ六人のは詩、岡村、池戸、室町のは短歌、私の譯稿は佐和山から何か原稿で援助してくれと言はれ、出したものだった。

『作文』は昭和十一年の八月に第二十輯を出してゐる、その目次は――

仲 間 (五)

亂 菊

詩 若い季節のために

月 蝕 む

花 罨

隨 筆

古い手帖

二匹の猫についで

秋原 勝二

三宅 豐子

小杉 茂樹

松原 一枝

池淵 鈴江

町原 幸二

小杉 茂樹

二二三

作文後記

表紙・カット

二一四

落合 郁郎

中尾 彰

——といふものである。

落合記す「作文後記」には次のやうにある。

本誌も漸く二十輯を迎へた。その間、止むを得ざる同人の移動は相當あつたが、感情的トラブルは一度もなかつたし、經濟的危機に際しても、只同人の眞摯な態度だけで切抜けて來た。うたゝ感なきを得ない。だがわれわれの仕事はいよいよこれからである。かつて當地から詩誌「亞」が新しきゼネレーションを以て日本詩壇に呼びかけた花々しさはなくとも、文學の地道な進路とやがては、日本の視野に現れたこの土地の特殊性をわれわれは明示すべきである。尤も前者にはアマチニアとしての、後者には主に客觀的な、困難を伴つてゐるが、それらを克服することにわれらは愉快な任務を感じてゐる。

本輯は大木の五十枚が遂に間に合はなかつたため、頁數が減少し、幾分寂寥を免れなかつたが、

讀者は同人と共に若冠秋原の若々しい努力を買つて頂きたい。

「ノート欄」は都合あつて本輯だけ休載することにした。「下略」

そして、この時の同人は、青木實、秋原勝二、池淵鈴江、大木一男、大谷健夫、落合郁郎、小杉茂樹、園冬彦、竹内正一、富田壽、町原幸二、松原一枚、三宅豊子、吉野治夫の十四人である。この内大木が大阪、竹内が哈爾濱にゐるだけで、あとはみな大連居住者である。

『滿蒙評論』の昭和十一年一月號、これは鈴木啓佐吉らの「滿洲ペン俱樂部」同人が乗り出して來てゐる頃だが、これに「滿洲文藝運動の方法と將來——作家クラブ設立計畫に對する私見」といふ一文が載つてゐる。署名は垂野作造とあるが、古川哲一とあたりだらうと私は睨んでゐる。大連に偏した記述であるが、當時の情勢を知る資料にはなるので、次に寫して見よう。

滿洲の文藝と稱しても、我々在滿邦人間の文藝に關することを指すものであつて、その運動の主体を爲すものは、人口的に最も多い大連であり、奉天、新京、安東等は、これに對し從屬的關係に

おかれてゐる。従つてこゝで滿洲での文藝運動とは大連での、それを指すことを意味するものである。

順序として、文藝運動の簡単な歴史を一瞥すると……

大正初年より、短歌、俳句等の運動が起り漸次旺んとなり、昭和初年に到るや詩、文學等の勃興をみ、四、五、六年頃になるや鼓も盛となり、各種の文藝家團體が設立された。斯くて乱立された文學グループの中には、昭和六年九月檢舉せられたる滿洲共產黨の連中が多数参加し、且つ彼等は、これらの文化團體を通じて、文化的アジ・プロを勇敢に行つてゐたので、自然、滿洲文壇ではプロレタリア文學運動が旺んとなり、實質的にも表面的にも自稱プロ作家が幅をきかしてゐた。

それに當時は、現在滿洲文壇で既成作家として沈黙を續けてゐる人々も第一線に立つて、活躍してゐたので、大正初年後、滿洲に於ける文藝運動らしいものが表面的に現はれて以來の活況を呈したのである。而るに作家的コミュニニスト達が一齊檢舉の嵐に會つて文壇から去つてしまふと、まるで夜店をハネた浪速町の様に、ひっそりと火が消えたかの如く、淋しくなつてしまつた。この原因に就ては、一、コミュニニスト達と共に活躍してゐた作家連中が檢舉の嵐に怖氣付いたこと、二當局が今回の思想事件に就て、文藝團體がその貯水池、或は培養地となつてゐたことに對し、文藝

グループに對し鋭い眼を光らし始めたことが擧げられてゐる。又客觀的には、政治的、經濟的に大轉換を餘儀なくされた滿洲の一般的、狀勢の變化が大きな外部的力として作用したことである。

その後、滿洲の文藝運動は、昭和九年初頃に到るまで「文壇不振」の掛聲ばかり大きく、何等具體的な運動は絶無に近かつた。滿洲の治安工作も確立に近づき、人心も比較的安定し、文化も新らしく建設文化として現はれ始めるや「文藝復興」の聲は、内地文壇のそれと相呼應して、各所に起り、大連新聞が、田中總一郎君去つた後、なくなつた文藝欄を復活し、次いで恩田明君が「藝術滿洲社」を作り、事變前より辛うじてその存在を續けてゐた「作文」（現在「一家」と改題）の同人達も活氣づき、昭和十年の七月以降になるや、「新興詩社」が起り、次いで「滿洲ペン俱樂部」が設立されて、文藝運動も昔日の活況の端初に就かんとして、昭和十年は暮れてしまつた。

昭和十一年は、如何に文藝運動が轉開するであらうか、この見透しを爲す前に、最近、表面に活動してゐる、「新興詩社」「滿洲ペンクラブ」「一家」の代表的な三團體に就て、紹介的な提燈持ちの一面的考察を行つて見る。

滿洲ペンクラブに就ては、未だ結成趣意書といつたものが發表されてゐないから、具體的なこと

は判らぬが、先月號の『滿蒙評論』に發表されたメンバーと作品とを通じて、その活動を推察するだけであるが、創作に、隨筆に評論にグループ同人を總動員して、潑刺たる活動の第一歩を示してゐる。(作品の藝術的價値は別として)斯る最初の意氣ごみから推して、將來、相當に活潑な活動性を期待出来よう。且つその活動範圍も文藝全般に亘る廣汎なものであり他の同業團體に對しても對立的なものでなく、協調的、要協的なもの如く見受けられる。

新興詩社(詩人クラブ)のグループは、滿洲評論(大内記すこれは間違ひで、『滿洲公論』か『滿蒙評論』であらう)に依つて第一聲を擧げた。元來、詩人と稱するグループなり、個人は文藝界に於ては、非運動的な或は非活動的なものとされてゐるが、この團體は結局當初から街頭進出を行ひ、詩と繪の展覽會開催をモーメントとして生聲を擧げた。一寸從來の文藝グループ等と趣を異にした動機をもつて結成してゐる。文藝運動の能動性を多分に欲してゐる滿洲では同グループの誕生に對し拍手を以つて迎へなければならなかつた。だが、文藝運動の内でも特に限られた。「詩」のみの運動であり、詩と稱する一つの限られた文藝カテゴリーの内の活動であるから、文藝運動といふ一般的な大きなカテゴリーの立場から見れば、より専門的なものとなり、行動の範圍も限定されてゐる。我々の立場からは、「詩」と云ふ限られた小さな文藝運動の一つのグループだけでなく創

作も、小説評論もと云つた様な、廣いグループのものとして欲しいと考へる。だがこのことは、文藝運動の一部門として、同グループの存在價値を過少評價するものではない。

『一家』はもと『作文』と稱して、相當活潑な活動をしてゐたが、最近は外部的に、餘り活動してゐないやうである。或る友人が『作文』は未だ續いてゐるのか、と文學運動を擲論するやうに筆者に質問したことがある。筆者は藝術的良心の立場から「馬鹿云ふない。『作文』の同人達は十年一日の如く、藝術の道に構進してゐるんだ藝術なんて、そんなに華かなものでなく茨の道なんだ」と大見得を切つたことがある。——それ程、『作文』はこゝ二、三年間といふものは對外的な活動を行つてゐない。一つの殻に入つたカタツムリの様に、何してゐるのか判らない。外部から見て「文學の持つ行動性を」失ってしまったか、忘れたか或は善意に解釋して——對外的な文學運動よりも、先づ内部的な充實、即ち宗教家が山にこもつて悟りを開くといったやうなことを、先決問題としてゐるのであらうか。と角一つのグループではあつても、同人を限定し、高い城壁を作つて、外部からの進入を防ぐと同時に、外部への積極的な働きかけが見られない。要するに、一つの文藝團體であつても、文藝運動が附隨してゐないセクト的なグループである。(下略)

このあと、いはゆる「作家クラブ」についての意見が書いてあるのだが、その部分は省略しよう。また、同じ雑誌に大木一男は満洲ペン倶楽部について「満洲ペン倶楽部を作つた發端はうちわのことでありますが鈴木君と北尾君が私の家へ訪ねて來られ、雑誌を出したいと言ふ相談があつたことに初まつてゐます。その時私は同人雑誌は成程文學を勉強する上に於いてひとつの方法には相違ないが、必ずしも唯一の手段ではないと思つてゐましたし、且つは満洲殊に小説を中心とする方面は未だ未だと言ふ氣がし、是を盛んにするにはさゝやかな同人雑誌では非常に六ヶ敷いことだ、とも考へてゐました。それに經濟上の問題がどこまでもつきまとつてきます。それで、私としては經濟上の困難性などを理由として再考を促したのであります。事實、私は、私自身にしても二つの矛盾した氣持をもつてゐます。ひとつは綺麗な雑誌に美しい活字で、自身だけの文學的欲求を満足させるために、たとへ微々たりとも小ぢんまりしたよい同人雑誌を作りたいと言ふ事。それから、もうひとつはそんな個人の感情は別問題にして、満洲の有力な雑誌の協力を得て、有意義なつまり一層社會性のある文學的活動を試みたいと言ふ事、これでありませう。そして、二回目に鈴木君がやはり此の問題で訪れて來られたとき、此の後者の意見を呈したのであります。それが、急轉直下満洲ペン倶楽部となりました。鈴木君に北尾君、それに私の愛友武禮君が「君の遣ることなら何でも一緒に遣る」と言つた意氣込み

で參加しました。其他二三の人達、また忘れてならないのは横澤氏や宮川君など、もう遠觀してゐる苦勞人までが我々の若々しい計畫に顔を貸して呉れました。……と書いてゐる。だが、この「満洲ペン倶楽部」も同人の轉出や何かでやがて姿を消した。『滿蒙評論』が本當に力をあまり入れなかつたとか、作品に傑出したものがなかつたとかいふ事情もあつたかも知れない。

ついでに、ほかの雑誌を見てみる。

『滿洲行政』の三卷三號（康徳三年三月）、いかにも堅い、その中で、わづかに武藤富男「管刑を見る」、谷清昭「ことば漫語」が柔か味を持つた記事である。

『月刊滿洲』昭和十一年八月號、「本號は思ひ切つて金をかけて見た」と城島舟禮君が書いてゐる。創刊八周年記念號である。發行所はまだ撫順にあつた。次のやうな記事が拾へる、

滿洲産業の開發と日滿ブロック經濟

奉天市政と協和會

河本

大作

上村

辰巳

戦さと煙草の話

新聞班の窓より

支那民衆は斯う言つて居る

續・五年莊閑話

秘密結社在家裡の研究

パミールは招く

鮎

隨感録より

撫順醫院にて

繪及び文

支那婦人笑林

コロンブスの弟子達

蒙古包の一夜

王道は日本人から

二二三

谷萩 少佐

柴野 少佐

秀木 公

寺田喜治郎

小林生之介

林君 彦

三溝 沙美

田原 豊

木村 毅

池邊 青李

堀江 憲治

庄司 通惟

龜谷 生

石敢 當

血染の寫眞

一口漫談

新東西公園の午前四時

狐 一靈

續・朱唇に聴く座談會

あたまをかくベイジ

くさめをするベイジ

東野 潤

小林 茗八

鯉木 沙禮

岩根 正雄

なか／＼賑かなものである。谷萩小佐は當時奉天特務機關にあつた。鯉木沙禮は近東騎十郎。林君彦

石敢當は石原巖徹。この編輯には平井武が大いに働いたらしい。彼は後に滿映に入り、更に北支へ行
た。湯岡子へ鞍山の藝者や女給を呼んでの座談會などタイシタモノである。

第十四章 「滿洲行政」と「モダン滿洲」

康徳四年六月の『滿洲行政』に野淵忠藏氏（民生部事務官）「滿洲國に於ける出版界の現況」と題ある一文の終りに言ふ――

「之を要するに滿洲國の文化事業に於て最も急を要するものは、自國民の間に著作能力を養成することである。之が爲めには凡ゆる機會に於て各種の天分ある者を發見し、之を日本に留學せしめて或は科學者として、或は文藝家として、或は又美術家として之を養成する等、以つて是等建國精神を把握した自國民の手に依つて著作せられた出版物を國民に供給することを圖らねばならない。斯くの如きは一見迂遠の憾無きにも非らずではあるが、又それだけに急を要する問題であり、且つ拱手傍觀して居たのでは、百年河清を待つが如きもので、到底其の實現は困難である。されば政府

に於て良く國內の現狀を洞察して、此の種の助成策に相當多額の豫算を投ずる決心を必要とし、且つ民間の各種團體、殊に國民の指導者を以つて自任する各新聞社、雜誌社に於ても、絶えず建國精神の作興に努力すると共に、學術論文、小説、文藝、美術、音樂等の懸賞募集を行ひ、或は講演會音楽會演藝會又は展覽會を開催する等國民の創作能力を養成することに助力す可きである。斯くの如く官民共力して自國文化の創造に努力するに非ざれば、國民精神の統一を期することは不可能である。若し文化を目して衣食足りたる後の贅澤事であると考ふる者ありとするならば、其れは文化が國民精神の發露であると共に、文化に依つて國民精神が左右せられる事實を忘れ、且つ國家の建設は國民精神の確立を以つて其の大本と爲すの重大事を忘却したる偏見なりと云はざるを得なく。」

まさに卓見であつたと言ふべきである。

因みに、この號には磯部秀見が三、四月號から續けて「滿洲國宗教國策論」を書いて居り、岡田金吉が隨筆「角力と明治時代」を寄せ、西田猪之輔の短歌「察哈爾に行く」三十首があり、なほ下島甚三の小説「黒い金魚」が出てゐる。そしてこの頃の向誌編輯者は大坂巖であつた。

さて、少しそれより時を経た昭和十三年八月の「モダン」を讀むと、文藝匿名時評は「G. W. の署名で次のやうに書かれてゐる。

淋しい地元文藝

原稿料を出さない。或ひは手が足りない、其の眞色々な理由はあつたらうが、新京日日學藝欄の類はないのは淋しいことである。新聞文藝欄としてまだ滿洲が、新京が、さ程まで文藝が理解されず、書く人も、讀む人も少なかつた頃から毎日五段六段のスペースを取つて華々しくやり初めたのは、滿洲でけいや内地新聞でも珍らしい事であつた。

そして最初は、その誕生をあれ程までに祝福された日目が最近あまりにも寂はす、只僅かに「ばくげき機」と「赤ペン」だけで辛ふじて特徴付け、山口の孤軍奮闘、一同に三つ四つ署名で書かれてゐるなど、實に氣の毒にさへ覺へるのである。

新京の書ける人間よ、君達は必ず一度は過去に日日の戸介になつたんじゃないのか。

今どこを原稿料云々を云へる身分になつたのかも知れないが月に一度は書いてやつたらどうか。大新京、實に活潑だつた。

僅かにもしる「原稿料を出す」、と云ふ餌も作者を引つけるには十分効果的ではあつたが、製版部を持つ趣味は、挿繪、カットなどのオマケまでついて完全に先聲日日の文藝欄を壓倒した形であつた。

特に在請作家と講家を動員して中篇連載を始めたのは、何と云つてもヒットであつた。が、和田社長になつてから虐待されてゐる様に見えるのは筆者一人だけの僻みであらうか。

新聞は營理事である、だから學藝欄は一體にどこも廣告の犠牲にはなるものではある。だが最近は何も目立つて出ぬ日の多くなつたのは只單に廣告部が益んになつてそれだけ新聞が景氣がいゝのだと、一概に考へられない。何故かならば、和田社長の特ダネ的宣傳をしてゐる「東京だより」は、新京の新聞に是非必要なものであらうか。

あれを讀む人は恐らくあれと同じ様な、いやあれ以上のものを内地新聞を通じて讀んでゐるので、はなかるるか、

人絹の和田日出吉、鮎川一族の和田、そして卓絶したジャーナリストとしての和田日出吉は、何も室伏高信あたりが、而も和田の新聞に書かなくとも、我々は十分御承知申し上げてゐるのである。この無駄を、切角出来た地元滿洲の文藝の爲に、より以上活用してくれてこそ和田の和用たる所

「じゃなかうか。」

情勢は漸次變つて來たのだつた。(それにしても、和田君は近頃でもまだ在滿文學者を輕視する傾向があるやうだ、この一文、誰が書いたのか、鋭い所を衝いてゐる。) *W.G.W.は東にあり。二三九一二三〇*
雑誌『新京』が『モダン滿洲』になつたのはこの年、五月からだつたと思ふ。
『新京』十三年一月號から我々は次のやうなものを拾ふことが出来る。

- 戦争と文學
- あゝ頃の支那
- 流水の幻想
- 中國映畫漫談
- 滿洲に於ける藝術論
- 新しき日への舞踊論
- 紀 醜 男
- 三井 實雄
- 長谷川 濤
- 守山 淨
- 長谷川 正雄
- 中山 義夫

- 今年の映畫についての走り書
- 狂歌師河田家のこと
- 久米仙人にあつた話
- 南京陥落(短歌)
- 結婚の仲人
- 老劉の正月(小説)
- 木崎 龍
- 板垣 守正
- 山川 博
- 津田八重子
- 河 利 致
- 盤 古 作
- 大内隆雄 譯

錚々たる面々が顔を並べてゐるわけであるが、木崎龍の「今年の映畫についての走り書」など、珍重すべきものであつた。

日記に散見する覺束ないメモを頼りに、自分の感想を書きつらね自分は自分なりの昭和十二年映畫總決算を作つておかうと思ふ。だから、自分の見掛つたものには、當然ふれないことにするし、だから「科學者の道」だとか「人生は四十二から」など、好評だつたものでも、ここからこぼれ落ちることになり、嚴密な決算にはなり得ないが、同時に又、こんな覺え書もあつてよからうと思

ふ。大體、映畫は現代人にとって生活の一部分になり切つてゐる、洋畫輸入禁止が痛切にこたへるのも、自分の體の一部をはぎとられるやうなものだからだ。だからその影響だとか、國策的對策の確立だとかも、痛切な問題になるわけで、更に、その發展と發展の方向も、ゆるがせに出来ない問題だ。やれ時間の浪費だとか、奢侈だとか、放縱だとか言つて、みたところで、唐變木の寢言に過ぎない。映畫は、すつとその先の深い所まで進んでゐるのだ。大體、日本の映畫對策なんぞなつてはゐない。歐米の企業は、日本といふ市場をいゝ喰物にしてゐる。アメリカ物など、特作物一本にお添物數本つかなければ買へない仕組になつてゐる。だから、その餘計な入費は觀客層にふりかゝつてくるし、それだけでなくも買ひ過ぎるやうな始末にもなる。一體日本の在外公館は文化的には無能に近い。或ひは無能をしひられてゐるのかも知らないが、それにしても、一寸動けば、映畫の合理的な輸入位わけなく出来ようといふものだ。爲替管理で歐洲映畫の輸入は統制出来ても、日本支社を持つアメリカ物には、それが利かないなど、相當のどかさを通りこした風景だ。輸入禁止などより、根本的な映畫對策を樹立すべきだ。尙輸入禁止は十二年一杯といふのが、今年四月まで持ち越しとなり、更に半永久的たるやも計られぬといふ有様になつた。非常時だから、といふのではおさまるまい。非常時なればこそ、文化對策は充分慎重を期せねばならない。他人事ではない滿洲映畫協會

も、充分腰を据えて萬全を期して貰ひたいものである。

右のやうな書き出しで始まつてゐる。(木崎がつねに、何を論じても、第一級の意見を書いてゐたことが右の引用でも理解される。)そして「禁男の家」「紅天夢」「永遠の戰場」「叛地の青春」「女性の反逆」「彼氏と女秘書」「新しき土」「女だけの部」「ジブシイ男爵」「からゆきさん」「平原兒」「嵐の翼」「潜水艦SOS」「目撃者」「豪華一代限」「結婚クーデター」等についての感想や批判を書いてゐる。木崎はこれらを東京で觀たのであつた。そして昭和十二年映畫總決算と前置きしながら、實は「締切りは過ぎてゐるし、僕も窮れてゐるので、今度はこれだけ」と言つて、四月までに觀た分をしら探つてゐないのである。四ヶ月に十六本——彼は映畫にも熱心であつた。このうち「女だけの部」を「傑作」とし、「樂しかつた」とし、「それにしても、市長のアレム、夫人のロゼニ、スペイン公のミニラ、僧侶のジューヴエ、誠にすばらしい俳優の演技である。彼等は禁酒一杯に動いて、われらを壓倒する。特にロゼニは神技を以て稱すべきだ。最後の場面、露台から市民に演説するところ、正に傑作である。われらは道力の掃見のうらに埋没された自分を、しばらくは取戻せないのである。傑作である。」と書いてゐる。「からゆきさん」については「演出大村典十は、これを河成